



北・その自然と人

札幌市博物館活動センター情報誌 ミューズ・レター

Muse Letter

札幌市博物館活動センターは自然系総合博物館の計画推進のため、市民とともに教育普及活動、展示・交流、調査研究、資料収集保存を行う活動拠点です。

2014.3 No.56

発行・札幌市博物館活動センター

〒060-0001 札幌市中央区北1条西9丁目 リンケージプラザ内5階

TEL 011-200-5002 FAX 011-200-5003 <http://www.city.sapporo.jp/museum/>

ヤドリギの好きな木は

ヤドリギはヨーロッパでは古くから宗教的に神聖な木で、お守りや幸運を呼ぶ木ともいわれ、最近ではその薬効も注目されています。ヤドリギは地面ではなく、木の上で一生を過ごす常緑の多年生植物です。他の木の枝や幹に根を食い込ませ、くっついたまま成長します。漢字で「寄生木」とも書かれるので、他の木にとりついて一方的に栄養や水を奪う完全なパラサイトというイメージを持たれがちですが、ヤドリギは自ら光合成をして栄養をつくりだせるので「半寄生」と表現されます。ただ、まだその生き方には謎が多く“不思議な”植物です。

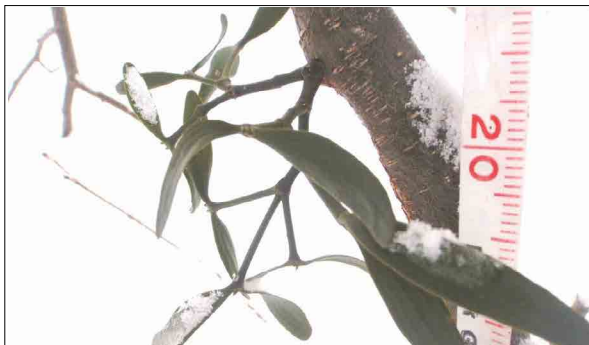
当センターで行った第10回「自然探究サポート事業」(平成12年度)の応募の中に、「ヤドリギはどんな種類の木につくのか?」という小学5年生からの疑問があり、本人とお父さんと学芸員と一緒に調査しました。調査地は豊平区西岡周辺の53か所の公園と羊ヶ丘と西岡公園の2か所の森林です。その結果、ヤドリギが着いていた木の種類で一番多かったのは、森林ではドロノキ、公園ではシラカンバでした。しかし、こ

れで疑問解決!ではなく、まず「森にはどんな種類の木がどのくらい生えているのか」を調べなくてはならないということに気づきました。そこで、森林ではヤドリギがついていた木の周りの木の種類も全部調べてみました(10m四方)。その結果、森の中で本数が少ない種類にもヤドリギが多くついていました。どうやら疑問を解決していくには、鳥の行動についても考えに入れる必要があります。なぜなら、ヤドリギは木の上にあって動けないので、鳥にタネを食べてもらって飛んで行った先でフンとして出してもらうことでタネを広げているからです。

調査では、ヤドリギが住宅街の中の公園にも以外とあることもわかりました。それは、その公園に鳥が来ているという証拠ともいえます。もしかすると、あなたの庭にもヤドリギの“幸運のフン”が舞い込むかもしれません。(山崎)

※日本にあるヤドリギは、外国にあるセイヨウヤドリギの亜種とされています。

※調査は範囲を広げて親子で継続中です。※必要に応じて許可を得て調査をしています。



ヤドリギ



ヤドリギがついている様子

「博物館」を意味する英語Museumの語源であり、喜びを表すmuse(ギリシャ語)と通信や手紙を意味するLetter(英語)からMuseLetterと名付けました。



アシリベツの滝

厚別川が硬い火山灰台地を削りながら流れるアシリベツの滝は、厚別川のエネルギーを見せつける。1879年(明治12年)、開拓使によって厚別水車器械所が建てられたが、現在は滝野すずらん丘陵公園となっている。

厚別川が”新しい”わけ

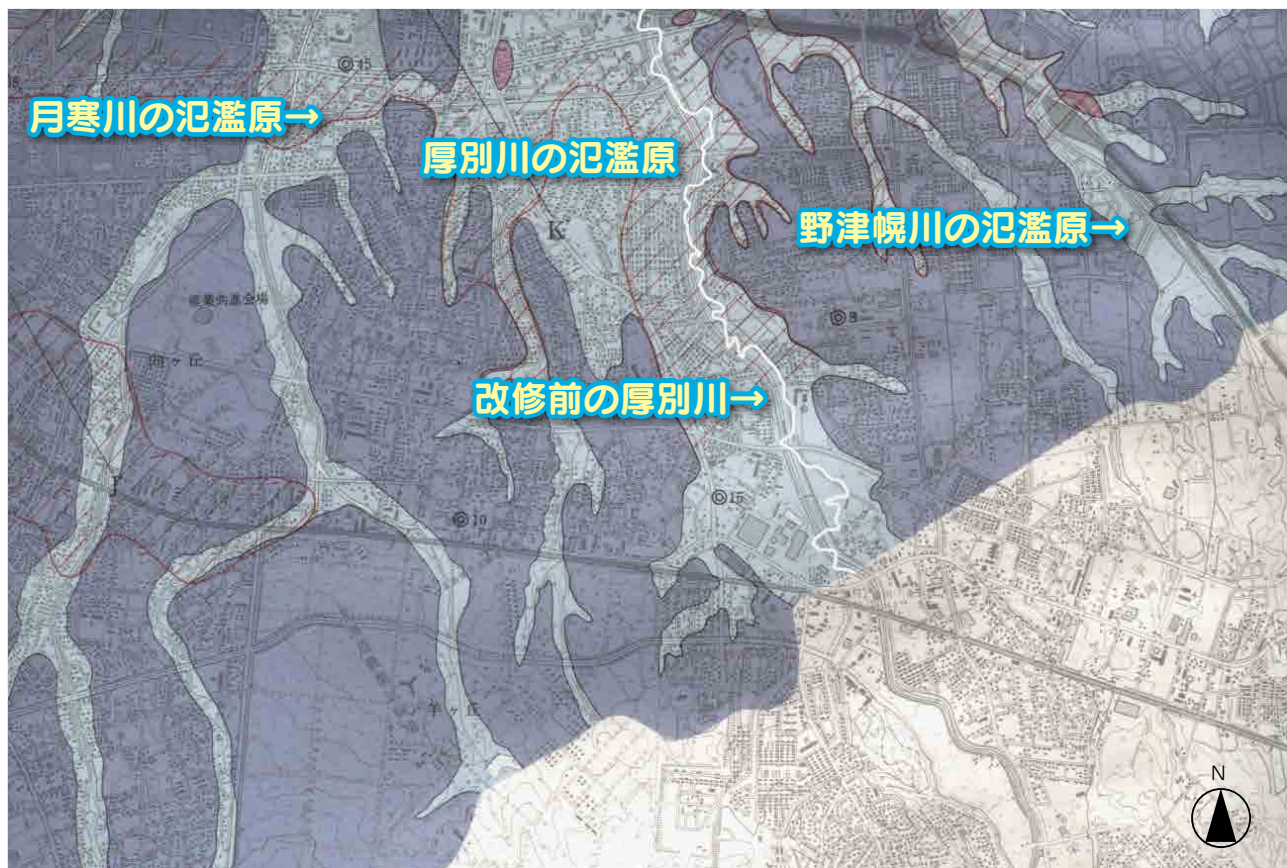
清田区は札幌の南東に位置しています。ほぼ全域が、およそ4万年前に噴火した支笏火砕流によって形成された火山灰台地の上にあり、その中央部を豊平川最大の支流である厚別川(あしりべつがわ)が南から北へと流れています。

厚別川(あしりべつがわ)の語源はアイヌ語で「アシル・ベツ=新しい・川」の意ですが、その東と西を並んで流れる、「野津幌川」や「月寒川」に比べ、新しい川であった理由が見当たりません。おそらく、どの川も火山灰台地が形成された後、ほぼ同時に流れ始めたはずで、ではなぜ厚別川だけが“新しい”のでしょうか？

『地盤地質図』は表層の土砂を取り除いた時に見える地層を色分けして示した図です。これを見ると、厚

別川の河床(氾濫原(はんらんげん):薄い色でぬられた範囲)が、その両側を流れる野津幌川や月寒川に比べ、広がっていることがわかります。これは、厚別川が一旦洪水になると周囲の火山灰を広く削り、押し流すほどの非常に高いエネルギーをもった川であることを物語っています。明治のはじめにはこのエネルギーを利用して滝野に「水車器械所」が造られたほどです。

現在の厚別川は氾濫原の東側に偏って流れています。かつては、おそらく現在よりも西側を流れていた本流が、過去の洪水によって現在の位置に流れを変えた際に、アイヌの人たちの間で“新しい川”「アシル・ベツ」と呼ばれるようになったのではないかと考えられます。(古沢)



『札幌及び周辺部地盤地質図』地質調査所(1991)より一部引用。